

■■■ 地の神（二話） ■■■ ===⇒三州横山話より

■ 地の神と墓地 ■

どこの家にも、代々の墓地が屋敷の傍にあつて（多くは一段高い所）その傍に地の神が祭ってありました。そこには観音の像や、南無阿弥陀仏と刻んだ、碑や馬頭観音の碑などが、五つ六つくらい建っていました。

家々の墓地は、現在は形のみで、死人のあつた場合は、村の共同墓地へ葬る規定ですが、四九日の忌明けが済めば、埋めた所の土だけ持って来て、代々の墓地へ引っ越してしまうので、そこには新しい碑も建ちますが、共同墓地には、今もって一つの碑も出来ない有様です。それは現在の共同墓地が、まだ充分村のものに親しめないためもあつて、あの人一人あんな所へやっておくのは可愛そうだななどと言って、一緒にすることも理由の一つで、また一つには参詣などに不便な点もあるらしいのです。

いずれの家にも、何々の屋敷址とか門あとといったものが屋敷の近くにあつて、それらが畑の中や路の傍に、第二の神ぐらの待遇を受けていて、盆とか正月には、新しく花壺も立て替えられ、松火も焚きました。

■ 門の入口 ■

道路から屋敷へはいるところは、家の神棚や仏壇と同じように、毎朝線香を立てたり茶湯をしたりしました。道から門へまっすぐに入口をつけると、魔がさすとも言いました。家は普通、主屋とカマ屋の二つに分かれて間に樋が懸かっていました。